



【農業列島】

産地ルポ

オクラ

鹿児島県指宿市カマタ農園

オクラ生産量日本一の指宿市で



「ヘルシエ」を生産する

カマタ農園さんは失敗を恐れない自然体！（編集部）



↑株式会社カマタ農園を率いる鎌田嗣海さんと奥さんの詩織さん。日本では珍しいお気に入りのスウェーデン製トラクターの前で「ヘルシエ」を披露。



↑栽培中の「ヘルシエ」圃場からは近くの竹山が望める。犬の世界的有名キャラクターが横たわった姿に似ているとSNSで拡散され海外から観光客が見物に来ることもあるとか。

地域概況

温暖な気候の指宿市

鹿児島県薩摩半島の最南端指宿市。カマタ農園さんがある旧山川町は山川港を中心とした鯉の町としても知られています。野菜栽培ではソラマメやスナップエンドウなどが有力農産物ですが中でもオクラの生産量は日本一を誇り、設備投資も少なく済むことから新規就農者でも取り組みやすく、地域の生産量が確保されています。



↑海沿いのJR山川駅は日本最南端の有人駅という。

「ヘルシエ」の反応に驚く

「ヘルシエ」は長くなってもかたくならないから、私の子どもも「ヘルシエ」ばかり好んで食べますよ」

今春から本格的に「ヘルシエ」を出荷する株式会社カマタ農園の代表、鎌田嗣海さんは従業員や研修生10名を抱え、品目ごとに5〜6人のグループでも共同で生産出荷を行う42歳の若手農業経営者です。鎌田さんは代々の農家ではなく、鉄筋工を営む父から独立し、31歳から農業に取り組んだ新規就農者でもあります。

中心となる作物は24haのキャベツと11haのレタス。キャベツは寒玉系で加工用が6割、青果用が4割で11月から翌年の6月まで出荷が続きます。キャベツが終われば後作にオクラやスイートコーンを栽培。オクラのスタートは3月12日播種（128穴4粒落とし）で4月11日定植、20aの作付けからとなります。指宿では露地とハウスの組み

合わせが多いのですが、キャベツがメインの鎌田さんは露地で8月末までがめどとなります。

従業員や研修生を抱えるカマタ農園さんの場合、周年で作業と収入の確保が必要なため、長期に収穫があつて価格の安定したオクラの栽培を組み込まれています。

「ヘルシエ」は昨年、地元種苗店から紹介を受けて3000粒ほど試作されました。初年度の青果物はすべてサンプルとして「こんなオクラがあるから」と、出荷先に全部配ったところ、「ぜひ来年出荷してほしい」と、反応が次々あつたそうです。鎌田さんも試しに子どもが通う幼稚園のお母さん方に配ってみたところ、オクラを生産するプ口のお母さん方から「味が違う、自分も作りたい！」と驚きの声が聞かれたそうです。

売り先にもどもついた今春、正式に作付けを開始したところ、東京の出荷先から引き合いが相次ぎ出荷が追い付かないほど。八百屋さんの「旬八青果店」からも客の受けがよいからとバラ出荷でオーダーがくるそうです。価格も高値がついています。通常オクラがA品1本7円程度の価格に対し、倍以上の価格で売れていくと、「ヘルシエ」の販売力やリピート力に驚かれています。B品は隣の道の駅に出荷され



↑ 4本立ちを基本とするが、2〜3本になるという（条間30cm、株間16cmの2列チドリ植え。生分解マルチ使用）。



← 有機・無農薬での栽培。キャベツの後作で元肥は残肥のみ。木葉で細めの作りだが節間が短く仕上がっている。堆肥には地元産である經由来の魚カスなども活用。



↑「農業は形からも大事」と、若いスタッフ確保のためユニホームも作成。メイン品目のレタスとキャベツが実になるモチーフ。明るい目立つ色で圃場のどこにいたのかがわかりやすいメリットも。



↑ 出荷先によって包装は変わる。今までにないオクラなので売りたいも本数など店舗に合わせて販売。



↑ 台風襲来の際は左右の抑えのバンドを中央で結束して強風に備える。台風への対応は当地では欠かせない。

「収量的には一緒に作る通常品種の半分ほどですが、倍以上で売れるから収穫の人員費コストもかからないし、その分ほかの作付けも増やせますから」と高値での取引が見込めることで経営的メリットを感じているようです。来年は鎌田さんと一緒に出荷するグルー

「普通オクラより花や株にも粘りがありますから、隣の普通品種より虫がつきにくいように思います」

「ヘルシエ」の収量は同時に栽培していた普通品種の「ブルースカイ」と比べ半分程度しか見込めません。栽培の印象は、気象条件の変化には敏感で昨年は2節目から着莢したものが今年は1〜2節とんでいるそうです。肥料に関しては、通常品種の半分以下の肥料で十分ということ。収量が少ないからと肥料を多く与えると草勢や吸肥力が強いので花がとんでしまうそうです。莢のサイズは8・5〜11cmくらいで出荷します。肉厚で重さもあります。

「ヘルシエ」の特長を 経営に生かす

ますが、それでも1本約7円の値付けでどんどん売れていくそうです。

う鎌田さんですが、収量が半分程度であったとしても高値がつけば十分経営には有利と見込んでいます。

「普通オクラより花や株にも粘りがありますから、隣の普通品種より虫がつきにくいように思います」

「ヘルシエ」の収量は同時に栽培していた普通品種の「ブルースカイ」と比べ半分程度しか見込めません。栽培の印象は、気象条件の変化には敏感で昨年は2節目から着莢したものが今年は1〜2節とんでいるそうです。肥料に関しては、通常品種の半分以下の肥料で十分ということ。収量が少ないからと肥料を多く与えると草勢や吸肥力が強いので花がとんでしまうそうです。莢のサイズは8・5〜11cmくらいで出荷します。肉厚で重さもあります。

鎌田さんの農業は 新規就農の好事例

プの仲間にも作ってもらって、自分も販売にも力を入れたいと計画中です。



↑ 広めにとった通路は「従業員がオクラにかぶれないように」とスタッフファースト。「風通しがよいのでかびがつかずに採光性向上のメリットも」。社員は日曜休日。鎌田さんのみ年中無休。

さらに、3年前には周囲の懸念をよそに7月30日にキャベツを5ha作付けしたところ10月に出荷ができ、ケースあたり3000円の値がつく大当たり。懸念通り虫による食害はありましたがB品は加工用で活用できましたし、栽培した圃場は緯度が少し高い位置にあり3℃くらい気温が低いことも被害を少なくしました。また、レッドキャベツが8玉入りで6000〜7000円の価格がついたこともあるそうで、その時は軽トラで荷物を運ぶたびに嬉しくて仕方がなかったそうです。「農業をやってよかった」と農業の醍醐味を話していただきました。今は実家の兄に農業ハウスのパイプ加工や基礎づくりもお願ひして、ハウス栽培も導入したり、落花生など新しい品目も試したいと話しておられました。

鎌田さん31歳のスタートは、借りた30aの圃場でオクラとマメ類の栽培でした。結果は補助金があってもほとんど赤字。2年目は山手の方にも土地を借りて、草が生え放題の土地を一から開墾して面積は2haに。その土地で栽培したのはレタス。周囲からはレタスは難しいと言われていたそうです。しかし、レタスが品薄となった翌年2月にこれを高値で出荷できたことで、3年目に売上は一気に1000万円を超え、新規就農助成金の交付を5年の満了を待たずに終了したそうです。補助金の枠内で続けるより早期の自立を目指されました。

鎌田さんを取材していると、終始自然体。興味があるからやってみよう、喜んでもらえるから作ってみよう、売り先に提案してみようと、失敗を無駄とは思わず取組まれる姿に成功の秘訣を感じました。もちろん無農薬で栽培をしていくには大いに勉強されているはずです。一からの圃場づくりも大変だったはず。堆肥や肥料についても研究されています。鎌田さんの強みは、野菜作りには素人だったため先入観を持たずに「自分は経験がないのだから失敗しても知識になる」というチャレンジ精神と感じました。聞けば学生時代は柔道に打ち込み、県の代表になった経歴をお持ちとか。その取り組み姿勢に納得しました。